「原爆句抄」復刊

長崎で被爆 松尾あつゆき作品集

魂から出る涙 つづる

長崎で被爆し、妻子4人を失った自由律俳人、松尾あつゆき(1904～83年)の「原爆句抄」が復刊された。被爆70年の今年、NHKプレミアムドラマ「だから荒野」(放送終了)で松尾の句が注目を集めた中、孫の平田周さん(56)＝西彼長与町＝の希望で再び世に送り出された。

松尾は昭和初期、荻原井泉水に師事し、俳句結社「層雲」で活躍。長崎原爆では平田さんの母にあたる長女みち子さん(85年死去)も重傷を負った。48年に再婚後、長野県で高校教諭として勤務。61年の定年退職後、長崎に帰郷した。

「句抄」は72年、原爆にかかわる俳句200句を収めた初版(非売品)が刊行された。75年には20句を追加し、文化評論出版(広島市)から出版されたが、その後、絶版状態だった。

今回の復刊本には「魂からしみ出る涙」と副題が添えられた。「花びらのような骨」(昭和20～22年)▽「信州で新たな暮らし」(同23年～)▽「長崎帰郷」(同40～46年)▽「病む日々」(同47年～)ーの4章と、被爆体験をつづった「爆死証明書」(同25年)の構成は初版と同じ。

当時の様子を伝えようと、旧字体も含め原文通り。「なにもかもなくした手に四まいの爆死証明」の句は、漢字でなく「四まい」と表記を統一。

松尾の句「いまは旅人として春雨のサンタマリヤの鐘」が書かれた表紙カバーの版画は、長崎市の版画家小崎侃さん作。作家の重松清さんが「すべてを奪われた悲しみと、怒りと、鎮魂と」ではじまる推薦文を寄せた。

書肆侃侃房刊。四六判、144ページ。1404円。全国書店で販売中。

(高比良由紀)

復刊された松尾あつゆきの「原爆句抄」